

フランス語の可能表現をめぐる対照研究方法論

— “savoir/pouvoir+不定詞” と中国語・日本語の可能表現(下) —

A Methodology for a Contrastive Study of Expressions of Possibility in French

: “savoir / pouvoir + *inf.*” Forms in French and Their Corresponding Expressions of Possibility in Chinese and Japanese(Part 2)

成戸 浩嗣 Koji NARUTO

(現代マネジメント学部)

抄 録

「フランス語の可能表現をめぐる対照研究方法論 — “savoir/pouvoir+不定詞” と中国語・日本語の可能表現(上) —」(『愛知学泉大学紀要』第1巻第2号所収)を参照。

キーワード

- | | |
|----------|---------------------------|
| 1. 可能表現 | expression of possibility |
| 2. 助動詞 | auxiliary verb |
| 3. 混合形式 | hybrid form |
| 4. 能力 | ability |
| 5. 動作/状況 | action/situation |

目 次

- 1 “savoir+不定詞” とそれに対応する中国語・日本語
 - 1.1 “savoir+不定詞” と “会V”
 - 1.2 可能と可能性
 - 1.3 “savoir+不定詞” とそれに対応する日本語
- 2 “savoir/pouvoir+不定詞” とそれに対応する中国語・日本語
 - 2.1 “savoir+不定詞”、“pouvoir+不定詞” の使い分け (以上、前号)
 - 2.2 “savoir/pouvoir+不定詞” と “会/能V” (以下、本号)
 - 2.3 “savoir/pouvoir+不定詞”、“会/能V” と日本語の可能形式
 - 2.4 可能表現としての普遍性
- 3 おわりに

2.2 “savoir/pouvoir+不定詞” と “会/能V”

“savoir+不定詞”、“pouvoir+不定詞” の使い分けに相当するものを中国語に求めるとすれば“会V”、“能V”のそれであるが、これらはどのように異なるのであろうか。1.1 で述べたように、“会V” は習得して身につけた能力によってできることを表わす点において“savoir+不定詞”と共通するのであるが、「熟達している」ことを表わすのに用いられる点においても同様であり、例えば以下のような表現例がみ

られる²⁶⁾。

(57) 他很会做中国菜。(彼は中国料理が上手だ。)

(岡部編著 1990:60)

(58) 他会作买卖, 我不会。

(あの人は商売がうまいが、ぼくはだめだ。)

(『岩波 中国語辞典』“会” の項)

一方、“能V” には「能力があってできる」ことを

表わす働きがあり、例えば

(4) 他**能**开汽车。

(59) 他**能**说英语。(彼は英語が話せる。)

(張・佐藤・内田 1997:71)

のような例が挙げられる。能力があってできるということは主体の側に属する要因によってできることであり、“能V”の働きはこの点において“会V”のそれと共通している。但し、“会V”が表わす能力については、これを主体の属性にとらえるという 2.1で紹介したような考え方が存在するが、属性とは「恒常的な状態」というべきものであり(この点は 2.1で述べた“savoir+不定詞”の場合と同様である)、時間の流れとは関わりがない。また、習得して身につけた能力によってできることを表わす“会V”の働きは、換言すれば、習得過程を視野に入れた可能を表わすということであり、この点は相原 1991:31、同 1997:20 が“会V”表現の成立を支える要因の一つとして「習得以前と以後との非連続性」を挙げていることや、『中国語虚詞類義語用例辞典(“能 会”の項)』が“能”を使うと、そういう能力が備わっているという気持ちが含まれ、“会”を使うと現在できるようになっているという状態を表す気持ちが含まれる」としていることによっても理解できよう。一方、“能V”が表わす可能の場合には、能力を備えるに至った習得過程が視野に入っていないため、同形式は、発話時をはじめとする基準時点において「できる」ことを表わす表現形式であるということができよう²⁷⁾。このことは、習得過程について明示された

(60) 我没学开车，**不会**开车。

(車の運転を習ってないので、運転できない。)

(60)’ *我没学开车，**不能**开车。

(郭春貴 2001:33、36)

の成立状況や、

(61) 这孩子刚**会**走路，还**不大会**说话。

(この子はやっと歩けるようになったばかりで、まだものが言えない。)

(《漢日辞典》“会”²⁸⁾の項)

の場合には歩くことを習得する過程が視野に入っ

ているのに対し、

(62) 他的腿伤好多了，**能**慢慢儿走几步了。

(彼の足の傷はずっとよくなり、ゆっくりと何歩か歩けるようになった。)

(《现代汉语八百词》、『中国語文法用例辞典』“能”の項)

の場合には歩く能力が失われていたがもとにもどったことを表わしているという相違がみられる点に端的にあらわれている。(61)と類似の客観的事実を前提としていても、習得過程を視野に入れないでコトガラを表現するのであれば

(63) 小孩儿**能**自己站起来了。

(子どもは自分で立てるようになりました。)

(張麟声 2001:100)

(64) 那孩子**能**说话了。

(その子は言葉を話せるようになった。)

(張・佐藤・内田 1997:72)

のような“能V”表現が成立するのであり、“会V”、“能V”の使い分けが極めて微妙なバランスの上になされていることがうかがわれる²⁸⁾。そもそも、《外国人学汉语难点释疑》:131 が“表示通过学习以后具有某种技术和能力，用‘会’，有时也用‘能’”としていることや、『中日大辞典(“能”の項)』が「初めて動作や技能を身につけた時は[能][会]どちらを用いてもよい。ふつうは多く[会]を用いる。すでにある能力が元に戻った時は[能]を用いる」としているように、“会V”、“能V”の働きには明確な境界があるわけではなさそうである。このことは、

(65) 这个人真是**能说会道**。

(この人は本当に弁がたつ。)

(《现代汉语八百词》、『中国語文法用例辞典』“能”の項)

のような常套句において“会V”、“能V”が共起していることからもうかがわれ²⁹⁾、両形式の働きは交錯しているというのが実態ではなかろうか³⁰⁾。(63)、(64)は習得過程を視野に入れずに「能力が備わった」ことを表わす表現である。(61)や(63)、(64)のような表現例をみていく際には、「いずれの形式を用いるのが正しいか」という二者択一的な判断もさること

ながら、「いずれの形式を用いるのがより自然か」、「各形式を用いた表現の前提となる客観的事実(or ニュアンス)の間にはどのような相違がみられるか」という観点から慎重に検討を重ねていく必要がある。
張・佐藤・内田 1997:72 が

(66) 他很**会**喝酒。(張・佐藤・内田 1997:72)

については「彼は飲み方が上手だ。(相手に勧めるのが上手、自分は酔わない程度に飲む 実際にはお酒にそれほど強くない可能性もある)」とし、

(66)' 他很**能**喝酒。(同上)

については「彼はよく飲める。(酒量が多い、よく飲む)」としているのは、

(2) 他**会**开汽车。

(59)' 他**会**说英语。(張・佐藤・内田 1997:71)

(4) 他**能**开汽车。

(59) 他**能**说英语。

の場合と同様に、一つの行為が可能であるか否かについて(61)と(63)、(64)との間にみられるような二通りのとらえ方が許容され、いずれのとらえ方がなされるかによってそれぞれにふさわしい形式が選択されることを示している³¹⁾。

習得過程を視野に入れた“会V”は、「できるかできないか」のレベルで可能を表わす傾向がある点で“能V”とは異なり³²⁾、このことは

(67) 他**会**说英语，**不会**说汉语。

(彼は英語は話せるが、中国語は話せない。)

(郭春貴 2001:36)

(67)' *他**能**说英语，**不能**说汉语。(同上:33)

の成立状況からもみてとれる。これに対し、

(68) 他**会**说汉语。

(68)' 他**能**说汉语。

を比較した場合には、“能V”を用いた(68)'の方が中国語を話すレベルの高いことが想定されるようであり³³⁾、このことは、数量を表わす成分を含んだ

(69) 他**能**游一百米，我**只能**游二十五米。

(彼は100メートル泳げるが、私は25メートルしか泳げない。)(郭春貴 2001:34)

(70) 她一分钟**能**打一百五十个字。

(かの女は1分間に150字タイプすることができる。)(《漢日辞典》“能”の項)

や、どの程度できるかを表わす

(71) 他**能**翻译英文。(彼は英語を翻訳できる。)

(郭春貴 2001:338)

(72) 我**能**用中文写信了。

(私は中国語で手紙を書けるようになった。)

(岡部編著 1990:58)

のような表現に“能V”が用いられていることとも符合し、同形式が「できることを前提にその能力の程度を表わす」のに適した表現形式であることがみてとれよう³⁴⁾。同形式のこのような性格は、

(73) 我们三个人里，数他**最能**写。

(ぼくたち3人の中では彼がいちばん筆がたつ。)

(《現代漢語八百詞》、『中国語文法用例辞典』“能”の項)

(74) 他**很能**团结周围的人。

(彼は周囲の人たちを団結させるのにたけている。)(同上を一部修正)

のような「熟達している」ことを表わす働きを有する点とも深く関わっていると考えられる。同様の働きが“会V”にもみられることは前述した通りであり、両形式はいずれも主体の「属性」を表わすこととなるが、この点においても“能V”との間で使い分けがなされているようである³⁵⁾。この点に目を向けることも、推測・推量を表わす働きの場合と同様に、可能表現の全体像をとらえるためには不可欠であろう。

一方、フランス語の“savoir+不定詞”、“pouvoir+不定詞”のうち、「できるかできないか」のレベルで可能を表わすのに適しているのは前者であり、

(75) Il **ne sait pas** nager, même pas un mètre.

(彼は、1メートルも泳げない。)

(佐藤・山田 2011:80)

のような例がみられる。(75)が「全く泳げない」ことを前提としているのに対し、

- (76) Tu **peux** nager jusqu'au rocher ?
(あの岩まで泳げるかい?) (六鹿 2016:247)

は「泳げる」ことを前提に「あの岩までの距離を泳げるか」を表わしている。同様に、

- (77) Non, il ne **pouvait** pas , c'était un **débutant**.
(彼はできなかった。初心者だったから。)
(NHK2003年7月:63) ※日本語訳は筆者

も「まったく能力がないわけではないが、初心者で未熟であるためにできなかった」ことを表わしており、“pouvoir+不定詞”が「できる」ことを前提とした表現形式であることがうかがわれる。このため、同形式をとる表現も、“能V”の場合と同様に「できることを前提にその能力の程度を表わす」のに適しており、例えば

- (78) Je **peux** courir aussi vite que lui.
(私は彼と同じくらい速く走ることができる。)(『ディコ仏和辞典』“pouvoir”の項)
(79) Avec cette main, je **ne peux pas** soulever plus d'un kilo.
(私のこの腕では1キロ以上のものを持ち上げられない。)(21世紀:749)

のようなケースが存在するが、“能V”のような「熟達している」ことを表わす働きはない。

これらの表現例をみると、“pouvoir+不定詞”が「主体とは切り離された外的状況のもとでできる」ことを表わす働きのほか、“能V”と同じく「主体に備わった能力によってできる」ことを表わす働きをも有するのではないかという考えがうかんでくる。“pouvoir”が名詞として用いられる場合の概念が「力、能力、実力、力量」などであることもこのような見方を支える根拠の一つとなる。辞書や参考書の説明をみる限りでは、“pouvoir+不定詞”の働きについて“savoir+不定詞”と比較して説明がなされるケースが多いため、外的状況のもとでの可能を表わす働きにおのずとスポットがあたると考えられる。しかし、『ロワイヤル仏和中辞典(“pouvoir”の項)』

が“pouvoir+inf.”について「多く外的状況に関係する(※傍線は筆者)」としていることからみとれるように、外的状況のもとでの可能を表わす働きはあくまで傾向であると解する余地がありそうである。これは、“savoir+不定詞”が否定形条件法で用いられた場合には、目黒 2000:250、『新フランス文法事典(“savoir”の項)』、『改訂版 フランス語ハンドブック』:266の記述にみられるように、“pouvoir+不定詞”と同じもしくは近い意味を帯びること(久松 2011:246の記述にみられるように、条件法の働きの一つとして語気緩和がある)、無情物について述べるケースが存在することなどからもうかんでくる考えであり、両形式の連続性がここに見いだされるのではなかろうか。ちなみに、《法汉词典(“pouvoir”の項)》は“pouvoir”の働きについて“【表示能力】能，能够，会”のように示した上で、

- (80) **Pouvez**-vous nager ? / 你会游泳吗 ?
(《法汉词典》“pouvoir”の項)

のような対応例を挙げているが、このように“pouvoir”と“会”を対応させることが適切であるか否かをも含め、“savoir”、“pouvoir”と“会”、“能”との対応関係について詳細な検討を重ねていく必要がある。上記のような考え方とは反対に、“savoir+不定詞”、“pouvoir+不定詞”の用法には明らかな断絶が存在する(用法上の連続性がない)のではないかという予測も否定しがたい。これは、「放任」を表わすとされる“laisser+不定詞”の働きについて、“faire+不定詞”が表わす「使役」とは一線を画した記述がみられるという、成戸 2018a:36で紹介したことをヒントとしてうかんでくる考えである。この場合には、“savoir+不定詞”が否定形条件法で用いられるケースの位置づけが問題となるが、この形がとられるのは「語気緩和」のためであり、これによって生じる“pouvoir+不定詞”との意味上の共通点あるいは相似点は、両形式の基本的な用法とは異なるレベルのものであると位置づけられよう。いずれの考え方をとるにせよ、中国語の“会V”、“能V”の場合に比べ、“savoir+不定詞”、“pouvoir+不定詞”の相違の方がより大きいと考えるのが自然である。

しかしながら、上記のいずれの考え方をとるにかかわらず、「主体に能力があってできる」ことを表わす“能V”に近い性格を有するフランス語の表現

形式は、“pouvoir+不定詞”よりも

(81) Elle **est capable de** comprendre cette explication.

(彼女にはこの説明が理解できる。)

(『プログレッシブ仏和辞典』“capable”の項)

(82) Je **suis** parfaitement **capable de** faire ce travail.

(私はこの仕事をじゅうぶんにこなせる。)

(『クラウン仏和辞典』“capable”の項)

のような“être capable de+不定詞”であると考えられる。このことは、同形式の働きについての辞書の記述におおむね「(～する)能力がある、～できる」と示されていることや、

(83) Il **est capable de** réussir.

／彼は成功する力がある。

(『新スタンダード仏和辞典』“capable”の項)

のような対応例が存在することからもうかがわれる。“capable”のような形容詞を用いた表現の方が、能力を潜在的に有することを表わすのに適していると考えられる³⁶⁾。

ちなみに、“savoir/pouvoir+不定詞”表現とそれに対応する英語の可能表現については、久松 2002:71 に以下のような例が挙げられている。

(84) Je **sais** nager, mais je **ne peux pas** nager aujourd' hui.

／I'm able to swim[I know how to swim],

but I **cannot** swim today.

([普段は]泳げますが、[体の不調などで]今日は泳げません。)(久松 2002:71)

『新英和中辞典(“can”の項)』には、可能を表わす英語の助動詞“can”について、「古期英語『知る』の意から」と示され、能力を表わす働きとして「…(～することが)できる」、「…のしかたを知っている」などが挙げられている。この記述をみる限りでは、“can”は“savoir”に極めて近い性格を有しており、両者の対応関係が成立しても何ら不自然ではない。このことは「…のしかたを知っている」を表わす用例として

(85) I **can** swim.(泳げる)

(『新英和中辞典』“can”の項)

などが収録されていることから理解できよう。しかし、久松の対応例においては“savoir — be able to(know how to)”, “pouvoir — can”のようになっている。このことには、“able”が形容詞であって、フランス語の“capable”と同様に「能力を潜在的に有する」という状態を表わす働きをすることや、有情物を主体とする可能表現を構成する傾向があることが影響していると推察される。意味的に“savoir = be able to”, “pouvoir = can”の関係が成立するわけでないことは言うまでもないが、“savoir”、“pouvoir”の働きを説明する場合には、上記のような対応例による方が、言語の実態をより厳密に反映することとなるのであろう³⁷⁾。

習得過程を視野に入れた可能表現の主体は、習得行為を行なう主体でもある有情物ということになるため、2.1 で述べたように、“savoir+不定詞”は有情物について述べる場合に限定して用いられる点で、そのような限定のない“pouvoir+不定詞”とは異なる。同様のことは“会V”、“能V”についてもあてはまり、前者は有情物について述べる場合に限定されるのに対し、後者にはそのような限定はなく、このことは

(86) *这个传真**会**复印文件。

(86)' 这个传真**能**复印文件。

(このファックスは書籍をコピーできる。)

(郭春貴 2001:33、36)

のような表現の成立状況からもみてとれる。

また、“能V”には、例えば

(87) 明天我有空，我**能**去。

(あす暇ですから行けます。)

(郭春貴 2001:34)

(88) 我们不是发起单位，这个会**能**参加吗？

(我々は発起人ではないが、この会に参加できるだろうか。)

(《现代汉语八百词》、『中国語文法用例辞典』“能”の項)

のように「客観的な事情や条件のもとで許される(＝可能である)」ことを表わす働きがみられるが³⁸⁾、

これは、2.1 で挙げた(46)'、(47)'、(49)'、(50)'、(51)' や

(89) Je **peux** vous aider. (お手伝いできますよ。)

(『新フランス文法事典』“pouvoir”の項)

(90) La photocopieuse est là-bas. Vous **pouvez** photocopier jusqu'à 20 pages en une fois.
(コピー機はあちらです。1度にコピーできるのは、20 ページ以内です。)

(藤田・清藤 2002:108)

のような“pouvoir+不定詞”の「主体とは切り離された外的状況のもとでできる」ことを表わす働きに相当する。“能V”、“pouvoir+不定詞”が上記のような可能の意味で用いられる場合、

(91) 国王说, 现在你**能**出去了。

(国王は言った、今、君は出てもよろしい。)

(郭春貴 2001:338)

(92) 这儿**能**抽烟吗?

(ここでタバコを吸ってもいいですか。)

(同上:35)

(93) Tu **peux** sortir après avoir fini tes devoirs.

(宿題が終わったら外に出てよろしい。)

(泉 1989:152)

(94) Est-ce que je **peux** fumer?

(たばこをすってもいいですか。)(同上:150)

のような許可を表わす表現((90)も許可を表わす表現とみることができる)や、

(95) 你**能**借我 100 日元吗?

(100 円貸してくれませんか。)

(郭春貴 2001:37、375)

(96) 你**能**帮我的忙?(手伝ってもらえますか?)

(船田 2003:104)

(97) Tu **peux** apporter le café à ton père?

(お父さんにコーヒーを持っていてくれる?) (500 語:147)

(98) Tu **peux** me donner un coup de main?

(ちょっと手を貸してくれませんか?)

(久松 2011:219)

のような依頼表現へとつながっていく³⁹⁾。

ちなみに、可能形式を用いた依頼表現については、久松 2011:219 に、人に何かを依頼する場合に(98)のような“pouvoir+不定詞”表現を用いると、それを受け入れるかどうかは相手次第であるのに対し、

(99) Paul, **veux** -tu répondre au téléphone, je suis pris(e) maintenant.

(ポール、電話に出て。忙しくて手が離せないから。)(久松 2011:219)

のような“vouloir+不定詞”表現を用いると、相手が断らないことが暗黙の前提となるというニュアンスの差がある旨の記述がみられる⁴⁰⁾。このことは、フランス語においては「願望(～したい)」を表わす“vouloir+不定詞”と「可能(～できる)」を表わす“pouvoir+不定詞”が、「依頼」を表わす用法において接点を有することを意味している。これに対し中国語の“能V”の場合には、願望を表わす“要V”、“想V”などとの間に上記のような使い分けはみられないようであり、依頼を表わす場合における願望表現との使い分けは“pouvoir+不定詞”独自の現象であることとなる。

ところで、「主体とは切り離された外的状況のもとでできるか否か」、「客観的な事情や条件のもとで許されるか否か(=可能であるか否か)」ということは、言うまでもなく主体の能力の有無によるそれとは異なる。このことは、“pouvoir+不定詞”は個別の場面における可能・不可能を問題とする場合に用いられるのに対し、“savoir+不定詞”は主体が恒常的に備えている能力による可能・不可能を問題とする場合に用いられるという形であられる((75)と(76)の相違にもこのような側面がみられる)。これらの点については、久松 2002:70 の「<pouvoir>は個々の場面で、できるかできないかを問題にする語であるのに対して、<savoir>は生来、または学習・訓練による能力があってできるという意味で使われる点に違いがある」という記述からもうかがわれ、“savoir+不定詞”が時空間限定を受けないのに対し“pouvoir+不定詞”には時間軸が想定されるという、2.1 で紹介したこととも符合する。一方、中国語の“能V”には、主体の能力の有無による可能・不可能のほか、渡辺 1999:149 の“当要强调在独特、个别状况中的能力，或者强调在数量上发挥时，就只用‘能’而不用‘会’”という記述にもみられるように、個別

の場面における可能・不可能を表わす働きがあるのに対し、“会V”の場合には、相原 1991:33、同 1997:31 が“会”で表される習得状態は、具体的な時間・空間の中であることがデキルということ言うにはそぐわない」としているように、個別の場面における可能・不可能を表わすことができず⁴¹⁾、この点においては“savoir+不定詞”と同様である。

2.3 “savoir/pouvoir+不定詞”、“会／能V”と日本語の可能形式

1.3 で述べたように、日本語の「V(ラ)レル」、「(Vスルコト)ガデキル」が表わす可能の範囲は、フランス語の“savoir/pouvoir+不定詞”や中国語の“会／能V”のそれよりも広い。この点は、『日本語学キーワード事典(「可能表現」の項)』が、可能の表現には主体の能力によってある動作が可能であることを表わす「能力可能」と、その動作を許す状況にある「状況可能」とがあるとし、能力可能の例として

- (100) この車は時速 150 キロで走レル。
(『日本語学キーワード事典』「可能表現」の項)

を、状況可能の例として

- (101) この道路は時速 150 キロで走レル。(同上)

をそれぞれ挙げていることや、能力可能も状況可能も

- (102) 高橋君は 1 時間に原稿用紙にして 15 枚分もワープロを打つコトガデキル。(同上)
(103) この部屋は電源がないのでワープロを打つコトガデキナイ。(同上)

のように「Vコトガデキル」という形式で表わせるとしていること、さらには森田 1989:1216 が

- (104) 両島を結ぶ橋は技術的には架けラレルが、財政的には架けラレナイ。
(森田 1989:1216)

のような表現例を挙げ、「同じ事実が条件によって可能にもなれば不可能にもなる」としていることに端

的にあらわれている⁴²⁾。「(Vスルコト)ガデキル」は可能を表わす働きに限定されているのに対し、「V(ラ)レル」は可能のほか、自発、受け身、尊敬を表わす働きを合わせもつという相違はみられるものの、両形式とも可能を表わす限りにおいては“savoir/pouvoir+不定詞”や“会／能V”の使い分けにみられるような、主体の能力の有無、能力を備えるに至った習得過程が視野に入っているか否か、主体自身に属する要因によるか主体とは切り離された外的な要因によるか、などの可能が成立する要因とは無関係であり、より普遍的な可能形式としての性格を備えているということができよう。

ところで、可能を表わす「V(ラ)レル」、「(Vスルコト)ガデキル」については、「願望」を出発点とした形式であるという記述が従来からみられる。例えば、寺村 1982:262-263、269 は、「可能態をとることのできる動詞は、これまで何人かによって指摘されてきたように、意志的な動作を表わすもの([+意志])でなければならない。『可能』というのは、何々しようとするに対してそれを妨げるものがない、という表現である、というふうに一般化することができるから、これは当然ともいえる」、「日本語の可能態の表わしている中心的な意味は、『何々しようと思えば、その実現についてさまたげるものはない』ということだといってよいと思う。そのような状態は、一時的なものであることもあるが、恒常的といってよい場合もある」としている。同様に、森田 1989:1213、1216 は、「同じ『逃げられない』でも、『刑事に追い詰められて逃げられない』『出口がなくて逃げられない』『舟がないので逃げられない』『君を置いては逃げられない』『足が痛くて逃げられない』と種々の理由が設定できる。いずれも“逃げたい”という意志<希望>が底にあり、その実現の成否を問題とするのが<可能>である。<可能>は<希望>の結論として存在し、“…したい”→“…することができる”と意志的にとらえるところに特色がある」、「『ことができる』は広く一般の意志的な動詞に付いて『読むことができる』『愛することができる』のように『られる』と並行して使われている」としている。

このように、日本語の可能表現が「願望」を出発点としていることは、「V(ラ)レル」、「(Vスルコト)ガデキル」が意志動詞と組み合わせられることと表裏一体をなしているが、可能形式をとると意志性は失われる。このことは、可能動詞がいわゆる無意志動

詞とされていることから理解できよう⁴³⁾。可能表現によって表わされるコトガラが無意志であることは、寺村 1982 の前掲記述や、同:262 の「動詞が可能態をとったとき、それは状態をあらわす動詞(アル、要ルなど)と同じように形容詞的な色合いを帯びたものとなる」からもみてとれるように、そのコトガラが一種の「状態」であること、すなわち「動作」ではなく「状況」であることとも符合する。日本語の可能表現がいわゆる状況表現としての性格を有していることは、『日本語文法事典(「可能」の項)』が「可能表現とは(A)意志的行為 (B)潜在的実現可能性をめぐる表現であって、(C)その実現の許容性のありかを行為者本人の能力を含めた『その場の状況』に求める表現である、といえよう」としていることからみてもとれる⁴⁴⁾。

一方、“savoir+不定詞”、“会V”に共通した働きは、森田 1989:1215 に示されている「V(ラ)レル」の働きのうちの「習得した能力によってそれを行うことが可能である」に相当する。“savoir+不定詞”の場合には“savoir”が「知っている」という語彙的意味をとどめているため、“会V”の場合には“会”が1.1で述べたように「知っている」に通じる語彙的意味をとどめており、かつ二音節語(動詞)を構成する成分としても働くため、いずれも動作表現としての性格をとどめた形式であることとなり、この点において状況表現を構成する「V(ラ)レル」、「(Vスルコト)ガデキル」とは異なっている。このことは、“savoir+不定詞”、“会V”がいずれも有情物について述べる場合に限定して用いられることと表裏一体をなしており、コトガラを「スル」的なものとして表現する形式である⁴⁵⁾点において、コトガラを「ナル」的なものとして表現する「V(ラ)レル」、「(Vスルコト)ガデキル」とは異なることを意味する。また、能力があってできることを表わす“能V”の働きは、森田に示された「V(ラ)レル」の働きのうちの「本来備わった能力から当然それが実現できる」に相当する(“会V”の働きの一つ「先天的に備わった能力によってできる」もこれに相当する)と考えられる。森田の提示した「V(ラ)レル」の働きの中にはさらに、「外的条件によって、自己の意志というよりも、周囲の情勢や規則などからそれが可能となる」があり、この働きはフランス語では“pouvoir+不定詞”によって、中国語では“能V”によってそれぞれになわられることとなる⁴⁶⁾。但し、2.1で述べたように、無情物について述べる表現や非人称構文に

“pouvoir+不定詞”形式が用いられることや、張麟声 2001:99、102-103 に、中国語では動詞の意志性の有無にかかわらず可能形式が用いられる旨の記述がみられるとともに

(105) 強烈的声响能震聾人的耳朵。

(張麟声 2001:102)

のような“能V”表現が挙げられていることから、“pouvoir+不定詞”、“能V”が動詞の意志性の有無にかかわらず用いられる形式であり、この点において日本語可能形式とは一線を画していることがみてとれる⁴⁷⁾。一方、“savoir+不定詞”、“会V”が可能を表わす場合には、2.1、2.2でもふれたように有情物について述べる場合に限定して用いられるものの、意志性の有無についてはどうであろうか。“会V”表現の意志性について勝川 2011b:167、173、174は、「本能、特性」のような「生得的能力」は意志性とは関与しないとし、“会”は「動作主体に属性として備わっている恒常的、非特定時間的に反復可能な能力が発現可能な状態にあることを表し、＜動作の実現＞そのものには焦点が当たらないため、その背景にある＜意志性＞とも関与しない」としている⁴⁸⁾。これらの記述からは、“会V”表現が可能を表わす場合に有情物を主体とする点と、意志性を有するか否かという点とが分けて考えられていることがうかがわれる。勝川の考え方によってフランス語の“savoir+不定詞”をみれば、有情物を主体とする点とともに、動作の実現そのものに焦点が当たらない点においても“会V”と共通しているため、これらを判断材料とする限りにおいては、意志性を“savoir+不定詞”表現の成立要件と認めるには至らない。

2.4 可能表現としての普遍性

中国語の“可以V”は、“会V”、“能V”とともに助動詞を用いた可能形式とされている。大河内 1997:136 は、“能V”、“可以V”の働きを「力量があってできる場合」、「周囲の条件からできる場合」、「許容されるからできる場合」のように示し⁴⁹⁾、それぞれの例として

(106) 我能(可以)说中文。

(わたしは中国語がはなせる。)

(大河内 1997:136)

- (107) 我们**能(可以)**去看电影。
(われわれは映画を見にゆくことができる。)
(同上)

- (108) 这里**能(可以)**抽烟。
(ここでタバコが吸える。)(同上)

を挙げている。また、藤堂・相原 1985:123 は、「能」と“可以”は意味が似通っていて、どちらも

- イ) (主語 — 生物名詞の) 身体や知恵に能力があり
できる(できない)
ロ) 客観的なある事情や条件のもとで許される、か
まわない(許されない)

の両方を表すことができます」とし、二つの成分を置き換えても成立可能な例として

- (109) 我一天**能**走四十公里。
(私は1日に40キロ歩ける。)
(藤堂・相原 1985:123)

- (110) 这儿**可以**吸烟吗?
(ここでタバコを吸ってもいいですか。)
(同上) ※日本語訳は筆者

を挙げる一方、“能”はイ)の意味で、“可以”はロ)の意味で使われることが多いとしている。さらに、張麟声 2001:100 は

- (111) 我家的**狗可以**自己打开厕所的门。
(うちの犬は自分でトイレのドアを開ける
ことができます。)(張麟声 2001:100)

のような“可以V”表現を

- (112) 张三**会**说英语。
(張三さんは英語が話せます。)(同上)
- (63) 小孩儿**能**自己站起来了。

とともに「能力可能」を表わす場合の例として挙げている。これらの記述からは、“能V”、“可以V”がそれぞれの主たる働きを異にしながら両形式のいずれも許容される領域が存在すること、両形式の使い分けが絶対的なものではなく傾向にとどまっていることがみてとれる⁵⁰⁾。“可以V”の働きは、教育の場においては、郭春貴 2001:35 の記述にみられるよ

うに「条件や許可によりできる」場合に限定して用いられると説明されることも多いが、これは同形式の典型的な働きについて述べたものであり、学習上の便宜を優先した記述としての側面が強いように思われる。“能V”と“可以V”の相違はむしろ、“能”は能力を表わし主格主語を要求することが多いのに対し“可以”は形容詞的であるため行為者主語をとることは少なく、

- (113) 土地**可以**种土豆。
(畠にはじゃがいもを作ることができる。)
(大河内 1997:138)

のような表現が普通であるという大河内 1997:138 の記述に端的に示されているのではなかろうか⁵¹⁾。

ところで、同:136-138 には、許容されることによってできることを表わす

- (108) 这里**能(可以)**抽烟。

のような場合には否定表現に“不能”、“不可以”のいずれも用いられるが、力量(=能力)があってできることを表わす

- (106) 我**能(可以)**说中文。

のような場合や、周囲の条件(=客観的な条件)からできることを表わす

- (107) 我们**能(可以)**去看电影。

のような場合には、否定表現が“不能”に統合される(大河内は「中和してひとつになる」と表現している)ことや⁵²⁾、“会”が本来「会得」を意味する動詞であって推量を表わす働きに通じていることなどから、中国語の可能の助動詞の中心は“能”であり“会”、“可以”は他に主たる働きがあると考えるのが合理的である旨の記述がみられる(大河内はまた、「一般に助動詞による可能表現は話者の判断であるが、その代表が“能”である」としている)。同様の考え方が藤堂・相原 1985:121 にもみられ、「一般に、肯定の場合はさまざまな助動詞を使い分け、それぞれにニュアンスの微妙なちがひがありますが、否定となると『能力』なら『能力』、『許可』なら『許可』を表す代表的な語に収斂されてしまいます」としている。

“能”を可能の助動詞の中心とする考え方は、“会”と“能”の間、“能”と“可以”の間にそれぞれ用法上の連続性があり、“能”の働きが他の二者のそれよりも広範な領域をカバーしていることを根拠としていと推察される⁵³⁾。

しかしながら、同じく可能を表わす成分であっても、“会+名詞”形式において動詞として働くこともある“会”とそのような用法をもたない“能”、さらには形容詞としての用法を合わせもつ“可以”ではかなり性格が異なると考えられるため⁵⁴⁾、三者を同一線上に並べて「可能の助動詞」と一括してあつかうことにどこまでの妥当性を認めるかという点については再検討の余地があるのではなかろうか。1.1では、不定詞と結びつくフランス語の“savoir”、“pouvoir”間に動詞的性格の強弱の差異が存在する点について述べたが、動詞的性格と助動詞的性格は反比例するものである。このことを参考に“会”、“能”、“可以”の相違をみていけば、動詞としても働く“会”、形容詞としても働く“可以”は助動詞的性格の強さの点で“能”におよばないとみることもできよう。

一方、フランス語の“savoir+不定詞”、“pouvoir+不定詞”の場合には、主体に備わった能力によってできることを表わすか、主体とは切り離された外的状況のもとでできることを表わすかという相違を前面に出した説明がなされることが多いとともに、“会V”と“能V”の間、“能V”と“可以V”の間にみられるような明確な形での連続性、すなわち“savoir+不定詞”、“pouvoir+不定詞”のいずれを用いても意味的に等価であるという現象が見いだしにくいいため、両者のいずれが可能形式の中心を占めているかという判断にはなじみにくい。

3 おわりに

以上、フランス語の“savoir/pouvoir+不定詞”表現を中心に、中国語の“会/能/可以V”表現や日本語の「V(ラ)レル」表現、「(Vスルコト)ガデキル」表現、可能動詞表現と比較しながら、可能表現について考察を行なうための着眼点、分析方法、予測される結論などについて述べた。

これらのうち、日本語の可能動詞を除く諸形式は、動作と可能を別個の事象として表わすものである。“savoir+不定詞”は、文法形式としての性格が相対的に弱く、「習得して身につけた能力によってできる」ことを表わす点において“会V”と共通する反

面、推測・推量を表わす働きの有無の点では異なる。一方、“pouvoir+不定詞”は、「主体とは切り離された外的状況のもとでできる」ことを表わす点において“能V”と共通する一方、「主体に備わった能力によってできる」ことを表わす働きの有無の点では異なる可能性がある。“会V”、“能V”の場合には可能を表わす働きや「熟達していること」を表わす働き、推測・推量を表わす働きにおいて連続性がみられるのに対し、“savoir+不定詞”、“pouvoir+不定詞”の場合にはそのような明確な形での連続性は見いだしにくい。また、「V(ラ)レル」、「(Vスルコト)ガデキル」は推測・推量を表わす働きをもたない反面、「能力可能」、「状況可能」の双方をカバーするのに対し、フランス語、中国語においては「状況可能」はそれぞれ“pouvoir+不定詞”、“能/可以V”によってになわれ、「能力可能」は“savoir/pouvoir+不定詞”あるいは“être capable de+不定詞”、“会/能/可以V”によって表現し分けられる。これらのうち、「V(ラ)レル」、「(Vスルコト)ガデキル」、可能動詞を用いた表現は状況表現であるのに対し、“savoir+不定詞”、“会V”を用いた表現は動作表現としての性格をとどめている。

以上の点を中心としてさらに詳細な検討を重ねていくことにより、それぞれの言語において「可能」がどのようにとらえられているか、具体的には、どのように下位分類され、それぞれがいかなる形式によって表わされているかがうきぼりとなり、3言語の枠を越えた可能表現の実態を明らかにすることができるのである。

注

26) 荒川 1986:6、同 2003:181-182 には、「肯定形では多く程度を表わす副詞をとともなう」のに対し、否定形では「程度差を含む場合」に「熟達していない(へただ)」を表わす旨の記述がみられる。相原 1991:32、同 1997:22-23 には、「骑马」や「开车」のような典型的な「技能」型行為は“很”などの副詞による修飾は不可能であるが、非典型的な「技能」型行為の場合には“会V”が副詞をとともなって「熟達している」ことを表わす旨の記述がみられる。これらの点について、勝川 2011 a :101-102、107-111、同 2011 b :170-171 は詳細な検討を行なっており、郭春貴 2017:34-35 には皮肉を含んだ表現となるケースが挙げられている。

27) この点は、相原 1991:33、同 1997:30 が“你现在能开车吗?”について、『今』という時点で、『ここ』の空間で、能力

を発揮できるか否かを問うている」としていることや、『中国語虚詞類義語用例辞典(“能 会”の項)』が「“不能”は現在できないことを、“不会”はできる状態になっていないことを表す」とし、それぞれの例として“他今天生病了，不能溜冰。(彼は今日病気なので、スケートができません。)”、“我现在还不会溜冰。(私は今はまだスケートができません。)”を挙げていることとも符合する。“能”のこのような働きについては、さらに渡辺 1999:148 を参照。「基準時点」については成戸 2014:389-390 を参照。勝川 2011 a :103-104、同 2011 b :165 は、「我会游泳，能游 1000 米。(私は泳げる。千メートル泳ぐことができる。)”における“会”、“能”はいずれも「能力がある」ことを表わすとしている。同様に渡辺 1999:148、片桐 2006:153-155 は、“会 V”、“能 V”が表わす可能はいずれも「能力」による旨の考え方を示している。「能力」からみた“会 V”、“能 V”の使い分けについては、さらに周国龍 2013:3、5 を参照。

- 28) この点については、相原 1997:15-18、荒川 2003:180-181、周国龍 2013:4-5 に詳しい記述がみられる。
- 29) 《实用现代汉语语法》:181 には“他能说会道，能写会算。”が挙げられている。常套句ではないが、荒川 2003:183 の“他不怎么会说，但很能写。(彼はしゃべるのはあまり得意ではないが、書くのは達人だ。)”も同様の例であろう。
- 30) (21)、(22)のような“会 V”表現は「先天的に備わった能力」によってできることを表わすが、“鸟能飞。(鳥は飛べる。)”(『中日大辞典“能”の項)、“蜜蜂能酿蜜。(《现代汉语词典》“能”の項)のような“能 V”表現も同様であることから、両形式の働きが交錯していることがうかがわれる。この点については、さらに讃井 1996:57-58、相原:1997:16-17、渡辺 1999:148-150、片桐 2006:153、159-162、勝川 2011 b :168-170 を参照。
- 31) この点については、荒川 1986:6、相原 1997:22-25、片桐 2006:155-158、162、勝川 2011 a :105 など参照。
- 32) “会 V”のこのような特徴については、相原 1991:30-32、同 1997:20-22、27-29 を参照。
- 33) 相原 1991:32 は、“我能说汉语。”は中国語が自己の「内在的能力」と化していないと使えないとしている。この点については、さらに勝川 2011 b :168 を参照。
- 34) この点については相原 1991:32-33、同 1997:27-30、讃井 1996:58、荒川 2003:181 を参照。
- 35) 「熟達している」ことを表わす働きにおける“会 V”、“能 V”の使い分けについては、相原 1997:25-27、渡辺 1999:149、荒川 2003:182-183、『中国語虚詞類義語用例辞典(“能 会”の項)』を参照。
- 36) “capable”は“être capable de+名詞”形式でも可能を

表わすことができるほか、補語なしで「有能な、能力のある、敏腕の」を表わす働きや、“être capable de+不定詞[or 名詞]”の形で「…する可能性がある／…するかも知れない」を表わす働きも有する。ちなみに、“être capable de”と同じく可能表現に用いられる“être+形容詞(句)”形式としては、「受容」を表わす“être susceptible de”や「適不適」を表わす“être (in)apte à”などが挙げられる。この点については『現代和仏小辞典(「可能」の項)』を参照。「よくできる(=熟達している)」を表わす場合にも“être fort en”、“être fort dans”のような“être+形容詞(句)”形式が用いられる。

- 37) 石野 2017:275 は、“pouvoir”が許可を表わす場合には“may[can]”を、能力を表わす場合には“be able to”を用いた英語の表現例を対応させている。『日・中・英 言語文化事典』:1096 は、「able は『～する能力をもつ、有能な』という意味の形容詞で、be able to～は『～できる』ことを表す。この場合、can とは異なり主語として普通は有生物がくることから、can より能動的に～する能力をもつことを意味する」としている。これに対し、G.N. リーチ著／國廣訳注 1976:112 には、“can”が“be able to”、“be capable of”と同義的であるケースを紹介するとともに、“Can you speak English?”のように永久的な技能を指す場合には“know how to(しかたを知っている)”と等しい旨の記述がみられる。また、過去における可能を表わす場合には、“be able to”と“can”の役割が入り替わるかのような観がある。この点については、毛利 80:190-191 を参照。
- 38) この点については藤堂・相原 1985:123-124、大河内 1997:136-137、周国龍 2013:4 など参照。
- 39) 讃井 1996:58 は、“能”が許可・不許可を表わす場合には疑問文もしくは平叙文の否定表現で使われるとしている。この点についてはさらに《实用现代汉语语法》:181、荒川 2003:185 を参照。《外国人学汉语难点释疑》:131 には、許可を表わす場合に“会”が用いられない点についての記述がみられる。可能と許可・依頼の関係については、日本語について述べた井島 1991:162-163、168 を参照。ちなみに金子 1980:65 は、可能の下位分類的な意味として「許可(or 許容)」をたてる文法上の根拠について問題提起を行っている。
- 40) 久松は、“vouloir”を用いた命令表現の例として“Veux-tu bien te taire! (お黙りなさい!)”を挙げている。
- 41) これらの点については、さらに渡辺 1999:150、156、勝川 2011 b :171-172、注 21、注 27 を参照。
- 42) 能力可能、状況可能については、さらに岩淵 1972:153、森田 1989:1214-1215、井島 1991:165-166、168、渋谷 1993:2、

5などを参照。

- 43) 日本語における可能が願望を出発点としている点、可能形式が意志動詞と組み合わせられる点については、さらに井島 1991:153-156、164-165、渋谷 1993:7-10、『日本語誤用辞典(「可能文」の項)』、『日本語文法事典(「可能」の項)』などを参照。『日本語誤用辞典(「ことができる」の項)』は、無意志動詞も「**コトガデキル**」を使えば、可能を表現できる場合があるとしている。可能形式、可能動詞が意志性を含まない点については、井島 1991:164-165、『日本語学キーワード事典(「動詞」の項)』などを参照。『日・中・英 言語文化事典(「できる」の項)』は「**デキル**」の特徴として、「その対象となることがらが人為的・意思的なものであっても、それを自然発生的なものとして表現している」を挙げている。
- 44) 日本語の可能表現が状態表現、状況表現としての性格を備えている点については、さらに寺村 1982:255-256、258-259、262、275、277、森田 1989:765、井島 1991:152-153、179-180、佐藤・山田 2011:79、成戸 2014:31-32、『日本語教育事典(「れる・られる」の項)』を参照。
- 45) ちなみに、安藤 1986:267 は “I **can** see a ship in the distance. / 遠くに船が**見エ**ル。” を挙げ、「スル」的な言語である英語と「ナル」的な言語である日本語との傾向の相違について考察を行なっている。この点については成戸 2014:254-256 を参照。
- 46) この点については、さらに呂雷寧 2006:55 を参照。「**V(ラ)レル**」のこのような働きは、注 22 で紹介したケースにおける働きとともに、本稿における「外的要因」による可能・不可能を表わす働きに含まれる。
- 47) 意志性を含まない場合に「**能V**」が用いられるケースについては、さらに宮本 1997:49、呂雷寧 2006:57、59-65 を参照。これに対し、遅校潔 2014:116-123、126-127 は、日本語可能表現の成立条件としての主体の「意志」を、「何々をしようとする」という意志、「力を尽くすような行為をしよう」という意志に分け、中国語の可能表現においてもこのような「意志性」の相違によって「**会**」、「**能**」が使い分けられるとして分析を試みるとともに、日本語可能表現の中には意志性と無関係に成立するケースがみられると主張している。
- 48) 注 21 を参照。
- 49) この点については、さらに丁声樹 1961:89-90、興水 1985:165-166、荒川 1986:5、同 2003:179-180、相原 1991:30、同 1997:44-46、李臨定 1993:115-116、勝川 2011 b:164、《外国人学汉语难点释疑》:137 を参照。
- 50) 「**能V**」、「**可以V**」の使い分けが傾向にとどまっている点については、太田 1958:196、大河内 1997:137 を参照。岡

部編著 1990:66-67 には、「**能**」、「**可以**」はいずれもある条件のもとで「できる」ことを表わすが、「**可以**」は「許す」、「…してもさしつかえない」という意味にも用いられる旨の記述がみられる。この点については、さらに古川 2001:112-113 を参照。《現代漢英词典(「可」の項)》や《中英辞典(「可」の項)》に、「**可以**」について “can ; may” と示されていることや、船田 2003:97 に、能力や条件が前提となっていて「…できる」を表わす場合の「**能**」は “can” に、許可を表わして「…してもよい、…できる」を表わす場合の「**可以**」は “can”、“may” に相当する旨の記述がみられることから、「**能**」の働きが英語の “can” と同様に能力可能と条件可能の双方にまたがる一方で、「**可以V**」の働きは “may” ほど限定的ではないことがみてとれそうである。

- 51) 相原 1997:53 は、「**能**」と「**可以**」は、一つの事態を本体と情況という相補分布的観点から見たものであると言える場合が多い。「**能**」は主体指向、「**可以**」は情況指向である」としている。これに対し讃井 1996:59 は、「**可以**」は主として『主語が何かを実現するに足るだけの条件を備えているか否か』による『～できる、～できない』の意味で使われます。その際、主語は人でも物でもかまいません」として「**銭可以造福，也可以造孽。(お金というものは幸福をもたらすこともできれば、罪つくりをすることもできる。)**」を挙げている。
- 52) これらの点については、さらに藤堂・相原 1985:123-124、荒川 1986:5、李臨定 1993:116-117、讃井 1996:59、相原 1997:12-14、郭春貴 2001:34-37、339、王・一木・苞山編著 2006:125、《外国人学汉语难点释疑》:132-133、『中日大辞典(「可」の項)』、《現代漢語八百詞(「**可以**」、「**能**」の項)》、《实用现代汉语语法》:181-182 を参照。渡辺 1999:155-156 は、「这种系统性的不对应情况，也是导致‘**能**’的否定句、疑问句比肯定句多的原因。」としている。荒川 2003:176、180 には、許容(荒川では「許可」)の否定を表わす「**不可以**」は現在では「**不能**」にとってかわられつつある旨の記述がみられる。ちなみに相原 1997:46-47、郭春貴 2001:35-36 は、共通語と方言の間にみられる「**不能**」の用法の相違にもふれている。
- 53) 相原 1991:33、同 1997:34-35 が指摘するように、「**会**」と「**能**」には「可能性・蓋然性」を表わす用法があるのに対し、「**可以**」にはないという相違もみられる。
- 54) 助動詞の特徴の一つとしては「名詞性の目的語をとれない」ことが挙げられる。この点については注 8 を参照。注 9 に挙げた王・一木・苞山編著 2006 や渡辺 1999 の見方もこの点をふまえてなされた可能性がある。「**会**＋名詞」表現は成立するのに対し「**能**＋名詞」表現が通常は

成立しない点については、『中国語虚詞類義語用例辞典(“能 会”の項)』、片桐 2006:157 を参照。《現代汉语词典(“能”の項)》は“名词前面文言可以用‘能’，白话只用‘会’，如：能诗善画/会英文/会象棋。”としている。“可以”の形容詞としての用法については、《現代汉语词典(“可”³⁾の項)》、《現代汉语八百词(“可以”の項)》、古川 2001:113 などを参照。

参考文献

- 愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典(増訂第二版)』大修館書店(1987)。
- 相原茂 1991. 「能・会・可以」, 『中国語』1991 年 1 月号, 内山書店, 30-33 頁。
- 相原茂 1997. 『謎解き中国語文法』, 講談社現代新書。
- 赤祖父哲二／川合康三／金文京／斎藤武生／ジョン・ボチャリ／林史典／半沢幹一編『日・中・英 言語文化事典』, マクミラン・ランゲージハウス(2000)。
- 朝倉季雄『新フランス文法事典』, 白水社(2002)。
- 天羽均・大槻鉄男・木内良行・佐々木康之・多田道太郎・西川長夫・山田稔・Jean Henri Lamare 編『クラウン仏和辞典』, 三省堂(7 版 2015)。
- 荒川清秀 1986. 「文における主体的な要素 — 能願動詞」, 『中国語』1986 年 3 月号, 大修館書店, 4-6 頁。
- 荒川清秀 2003. 『一步すんだ中国語文法』, 大修館書店。
- 安藤貞雄 1986. 『英語の論理・日本語の論理 — 対照言語学的研究 —』, 大修館書店。
- 石野好一 2017. 「確信度の表現に関する日仏語対照研究」, 青木三郎編『フランス語学の最前線 5』, ひつじ書房, 269-308 頁。
- 井島正博 1991. 「可能文の多層的分析」, 仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』, くろしお出版。
- 泉邦寿 1989. 『フランス語、意味の散策 日・仏表現の比較』, 大修館書店。
- 市川保子編著『日本語誤用辞典 外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』, スリーエーネットワーク(2010)。
- 岩淵匡 1972. 「受身・可能・自発・使役・尊敬の助動詞」, 『品詞別日本文法講座 8 助動詞Ⅱ』, 明治書院, 133-166 頁。
- 『NHK ラジオ フランス語講座』2003 年 7 月号, 日本放送出版協会。(略称 NHK)
- 王占華・一木達彦・苞山武義編著 2006. 『中国語概論[改訂版]』, 駿河台出版社。
- 大賀正喜ほか編『プログレッシブ仏和辞典』, 小学館(2 版 2008)。
- 大河内康憲 1997. 『中国語の諸相』, 白帝社。
- 太田辰夫 1958. 『中国語歴史文法』, 朋友書店(新装再版 2013)。
- 岡部謙治編著 1990. 『この中国語はなぜ誤りか』, 光生館。
- 郭春貴 2001. 『誤用から学ぶ中国語 — 基礎から応用まで —』, 白帝社。
- 郭春貴 2017. 『誤用から学ぶ中国語 続編 2』, 白帝社。
- 片桐光知子 2006. 「“会”と“能”の使い分け — 一般的な能力を表す場合を中心に —」, 『日中言語対照研究論集』第 8 号, 日中対照言語学会(白帝社), 152-164 頁。
- 勝川裕子 2011a. 「可能の助動詞“会”の表現機能と『上手い』への派生について」, 『中国語教育』第 9 号, 中国語教育学会, 101-114 頁。
- 勝川裕子 2011b. 「可能の助動詞“会”の属性描写機能」, 『日中言語対照研究論集』第 13 号, 日中対照言語学会(白帝社), 163-177 頁。
- 金子尚一 1980. 「可能表現の形式と意味(I) — “ちからの可能”と“認識の可能”について —」, 『共立女子短期大学紀要(文科)』第 23 号, 62-76 頁。
- 倉石武四郎『岩波 中国語辞典 簡体字版』, 岩波書店(1990)。
- Claude ROBERGE・Solange 内藤・Fabienne GUILLEMIN・加藤雅郁・小林正巳・中村典子『21 世紀フランス語表現辞典 — 日本人が間違えやすいフランス語表現 356 項目 —』, 駿河台出版社(2 版 2004)。(略称 21 世紀)
- 小池清治・小林賢次・細川英雄・犬飼隆編集『日本語学キーワード事典』, 朝倉書店(1997)。
- 小稲義男・山川喜久男・竹林滋・吉川道夫編『新英和中辞典』, 研究社(5 版 1985)。
- 奥水優 1985. 『中国語の語法の話 — 中国語文法概論』, 光生館。
- (財)フランス語教育振興協会編『CD・イラストで覚える フランス語基本 500 語』, 朝日出版社(1998)。(略称 500 語)
- 佐藤康・山田敏弘 2011. 『日本語から考える フランス語の表現』, 白水社。
- 讃井唯允 1996. 「助動詞(能, 会, 可以)」, 『中国語』1996 年 10 月号, 内山書店, 56-59 頁。
- G. N. リーチ著／國廣哲彌訳注 1976 『意味と英語動詞』, 大修館書店(4 版 1985)。
- 渋谷勝己 1993. 「日本語可能表現の諸相と発展」, 『大阪大学文学部紀要』第 33 巻第 1 分冊, 1-260 頁。
- 周国龍 2013. 「可能表現『会』と『能』の使い分けについて」, 『鈴鹿国際大学紀要』CAMPANA No. 20, 1-10 頁。
- 鈴木信太郎・中谷解ほか著『新スタンダード仏和辞典』, 大修館書店(1987)。
- 高橋弥守彦・姜林森・金満生・朱春躍編著『中国語虚詞類義語用例辞典』, 白帝社(1995)。

田村毅・倉方秀憲・恒川邦夫・吉田城・春木仁孝・牛場暁夫・東郷雄二・石井洋二郎・支倉崇晴編『ロワイヤル仏和中辞典』, 旺文社(2版2005)。

遅蛟潔 2014. 「現代日本語可能文における意志性と可能文の類型——中国語の“会”文と“能”文との対照から——」, 『日中言語対照研究論集』第16号, 日中対照言語学会(白帝社), 111-130頁。

中條屋進・丸山義博・G. メランベルジェ・吉川一義編集『デイク仏和辞典』, 白水社(2003)。

張麟声 2001. 『日本語教育のための誤用分析 中国語話者の母語干渉20例』, スリーエーネットワーク。

張黎・佐藤晴彦・内田慶市 1997. 『中国語表現のポイント99』, 好文出版。

寺村秀夫 1982. 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』, くろしお出版。

藤堂明保・相原茂 1985. 『新訂 中国語概論』, 大修館書店。

成戸浩嗣 2014. 『日中・日仏対照研究』, 好文出版。

成戸浩嗣 2018a. 「フランス語の使役表現をめぐる対照研究方法論(上)」, 『現代マネジメント学部紀要』第6巻第2号, 愛知学泉大学現代マネジメント学部, 29-49頁。

成戸浩嗣 2019. 「フランス語の可能表現をめぐる対照研究方法論——“savoir/pouvoir+不定詞”と中国語・日本語の可能表現(上)——」, 『愛知学泉大学紀要』第1巻第2号, 愛知学泉大学, 53-66頁。

新倉俊一・朝比奈誼・稲生永・井村順一・富永明夫・宮原信・山本顕一著『改訂版 フランス語ハンドブック』, 白水社(1996)。

日本語教育学会編『日本語教育事典(縮刷版)』, 大修館書店(1987)。

日本語文法学会編『日本語文法事典』, 大修館書店(2014)。

久松健一 2002. 『英仏日 CD付 これは似ている! 英仏基本構文100+95』, 駿河台出版社。

久松健一 2011. 『ケータイ [万能] フランス語文法 実践講義ノート』, 駿河台出版社。

藤田裕二・清藤多加子 2002. 『英語もフランス語も 比較で学ぶ会話と文法』, 評論社。

船田秀佳 2003. 『英語がわかれば中国語はできる』, 駿河台出版社。

古川裕 2001. 『チャイニーズ・プライマー——New Edition——』, 東方書店。

三宅徳嘉・高塚洋太郎・田島宏・大賀正喜・山方達雄編集『現代和仏小辞典』, 白水社(1994)。

宮本厚子 1997. 「現代中国語の助動詞『能』」, 『中国言語文化論叢』第1集, 東京外国語大学中国言語文化研究会, 45-61頁。

目黒士門 2000. 『現代フランス広文典』, 白水社。

毛利可信 1980. 『英語の語用論』, 大修館書店(4版1984)。

森田良行 1989. 『基礎日本語辞典』, 角川学芸出版(10版2005)。

李臨定著／宮田一郎訳 1993. 『中国語文法概論』, 光生館。

呂叔湘主編／牛島徳次・菱沼透監訳『中国語文法用例辞典——《現代漢語八百詞増訂本》日本語版』, 東方書店(改訂版2003)。

呂雷寧 2006. 「使用範囲から見た日中両言語の可能表現」, 『ことばの科学』第19号, 名古屋大学言語文化研究会, 53-66頁。

六鹿豊 2016. 『これならわかる フランス語文法 入門から上級まで』, NHK出版。

北京外国語学院編『中英辞典』, 商務印書館香港分館(1979)。

丁声树 1961. 中国語文雑誌社編『現代漢語語法講話』, 商務印書館。

渡辺麗玲 1999. 「助動詞“能”と“会”の句法語義分析——以表示能力与可能性为中心——」, 『現代中国語研究論集』, 中国書店。

『法漢詞典』, 上海译文出版社(1979)。

吉林大学漢日詞典編輯部『漢日辞典』, 吉林人民出版社(1982)。

刘月华・潘文娛・故群『实用现代汉语语法(増訂本)』, 商務印書館(2001)。

呂叔湘主編『現代漢語八百詞(増訂本)』, 商務印書館(1999)。

『現代漢英詞典』, 外語教學與研究出版社(1988)。

叶盼云・吳中偉編著『外國人學漢語難點釋疑』, 北京語言文化大學出版社(1999)。

中國社會科學院語言研究所詞典編輯室『現代漢語詞典』, 商務印書館(5版2005)。

(原稿受理年月日 2019年10月9日)